

## 29 福祉機器開発への専門職によるアドバイス支援

研究所 福祉機器開発部 井上 剛伸, 中村 美緒, 白銀 暁

### 1. はじめに

我々は、医療福祉専門職、開発者、そして両者の合意形成や相互理解に向けた援助を行うファシリテータの3者で構成する「開発支援ワークショップ」を提案し、開発段階の機器のアドバイス支援を行った。この手法の目的は、ワークショップを通じて、臨床現場で最も上手く使えそうな使用者（以下、ターゲットユーザ）とその使用場面や状況、使用時の課題を抽出していくことである。今回、パナソニック株式会社エコソリューションズ社で開発している自立移動リハビリ訓練支援機器を対象に、リハビリテーションに関連のある専門職から参加者を募り、開発支援ワークショップを実施した。本稿では、ワークショップの結果に基づき、当センターでアドバイス支援を実施した意義について考察する。

### 2. 方法

参加者は、リハビリテーションに関連があり病院や施設に勤務している作業療法士、理学療法士、看護師と、機器を開発している開発者とした。ファシリテータは、福祉機器開発に携わった経験のある理学療法士と作業療法士各1名とし、これらの参加者を5-6名で構成する2グループに分けた。ワークショップは、Phase1:試用評価、Phase2:ヒアリング調査、Phase3:開発要素マップ作成の3段階の過程から成る。Phase1:試用評価は、実際に機器を試用してもらい、参加者が使用の際に気づいたことをカメラで撮影した。Phase2:ヒアリング調査は、開発者が医療福祉専門職に聞きたい質問を用意し、その内容について、グループ内で議論を行った。Phase3:開発要素マップ作成では、臨床現場で最も有効に使用できそうなターゲットユーザを決め、そのユーザの生活状況や使用場面、使用における課題、商品性といった開発要素について話し合った。そして、これらの結果をグループで1枚の開発要素マップにまとめた。今回のワークショップでは、この3過程をPhase1,2とPhase3の2日間に分けて実施した。

### 3. 結果

開発支援ワークショップを実施した結果、2グループで2枚の開発要素マップが出来上がった。1つのグループから、病院や施設といった勤務領域にとらわれない様々な領域や視点で、それぞれ2種類のターゲットユーザが抽出された。ワークショップ後に、開発者からは、「普段はなかなか専門職に聞けないような内容を聞くことができた」という意見が聞かれ、専門職からも、「色々な人と交流できたことは楽しかった」という意見が聞かれた。

### 4. 考察

専門職は、臨床現場における経験と知見を基に、機器の特性を見極めて最適なユーザを抽出し、さらに適切な使用場面の想定と問題点を挙げるができる。当センターは経験豊富なベテランが多く、各部署で専門性を兼ね備えている。さらに、研究所には、専門職と開発者の両方の経験や情報を持ち合わせている研究者が存在し、双方の専門用語を翻訳して相手に伝えることができる。今回の開発支援ワークショップでは、当センターの各部門の協業により、効果的なアドバイス支援につながったと考えられる。